第５学年　音楽科　学習指導案

奈良教育大学附属小学校　教諭　眞田　理世

１．単元名

世界のいろいろな声の表現や楽器の響きを楽しもう（器楽）
－フォルクローレ『風とケーナのロマンス』－

２．単元の目標

○曲想（リズム、速さ、調性）を感じとる。曲想と旋律やリズムの特徴との関りや、歌詞の内容とのかかわりについて理解している。

（知識及び技能）

○曲想（リズム、速さ、調性）から曲にあった表現を考え、演奏することができる。

（思考力･判断力･表現力）

○ペルーの民族音楽の元となっているフォルクローレや、フォルクローレが発祥したアンデス地方の文化に関心を持ち、主体的に演奏することができる。

（主体的に学習に取り組む態度）

３．単元について

（１）教材観

本題材はペルーの民族音楽であり、アンデス地方で発祥したフォルクローレと呼ばれる音楽である。フォルクローレとは、ラテンアメリカ諸国の民族音楽や、民俗音楽に基礎を置いた大衆音楽のことである。ラテンアメリカ各地にそれぞれ独自性に富んだフォルクローレ音楽が存在するが、中でもアンデス山脈周辺の国々の音楽アルゼンチンのパンパ（草原地帯）の音楽、そしてパラグアイの音楽が知られている。本曲は、このアンデスの文化に着想を得て作曲されており、「はるかな時の中に　眠りし夢をうたう」という歌詞からは、時を大きくさかのぼり、アンデス文明が発展していた時代を思わせる。

アンデス文明とは、紀元前 1000 年ごろに南米大陸にあるアンデス高原一帯に生まれた文明である。紀元前 1000 年ごろから、ペルー北部中心にチャビン文化が広がり、紀元前後からモチカ文化、ナスカ文化、ティアワナコ文化と分化していった。その後 11 世紀ごろからチムー帝国が成立し、15 世紀を境にインカ帝国の出現によりアンデス文明は最盛期を迎える。しかしインカ帝国は西暦 1532 年、スペイン人のピサロ率いる征服者によって滅亡した。

また、アンデス文明と他の諸文明の明らかな違いは山間部や高原地帯で発展したことだといわれている。ほとんどの文明が大河沿いで発展したのに対し、アンデス文明はアンデス高原を中心に発展した。ただし、アンデス文明は山間部の盆地や海岸沿いでも確認されているため、これらはアンデス高原の文化と交流しながら、総体的にアンデス文明全体を発展させていったとされる。山間部や海岸沿いではアンデス高原とはまた違った環境利用法が確認されており、人々は各地の自然と共生しながら文明を築いていったことがわかる。

『風とケーナのロマンス』はギター製作者兼ギタリストのホセ・ラミレス・トーレス（1858－1923）の作品であり、フォルクローレの定番曲として知られている。南米の民族楽器ケーナの愛好者にも人気が高く、コンサートなどでの演奏機会も多い。この曲はペルー地方の民族音楽で、ニ短調、８分の６拍子、 二部形式である。ソプラノパートとアルトパートがあり、前半は同じリズムで３度または４度のハーモニーである。後半は、アルトパートが追いかけるように重なり変化の面白さを味わうことができる。旋律はドリア旋法の素朴な味わいがあり、ゆったりとした動きで、情緒的である。

また全体を支える低音伴奏やリズム伴奏の力強い感じも特徴的である。曲と同時にアンデス地方の文化を知ることは曲想を感じ、表現する際の支えとなるだろう。

（２）児童観

本学級の子どもたちは音楽が好きな子が多く、学習してきた曲を廊下で口ずさんだり、校外学習に行くバスの中で合唱したりと日々のくらしの中でも歌っている。音楽の授業では、リズムに合わせて身体や頭を動かしたりする姿があり、音楽を感じ、全身で表現している様子がうかがえる。特に２学期に歌った歌曲 『魔笛』より『鳥刺しパパゲーノ』（モーツァルト作曲）は、魔笛のお話がベースとなっているので場面が想像しやすく、陽気な人物像のパパゲーノと照らし合わせて歌の表現にもつなげることができた。リコーダーにおいては、２学期は『ハトと少年』に取り組んだ。この曲も 映画「天空の城ラピュタ」に出てくる曲であり、お話が元になっている。

曲想と曲の背景にあるものからイメージを持ち、表現することができる子どもたちであるので、『風とケーナのロマンス』を学習する際も、フォルクローレがもつ背景やアンデス地方の文化を知り表現に生かしていってほしい。

（３）指導観

本単元の指導にあたっては、まず歌唱から取り組ませる。そこで歌詞の内容を理解し、範唱を聴いたり、挿絵や写真等で情景を思い浮かべたりして曲のよさや特徴について話し合う。また、この曲がペルー地方の民族音楽であること、ペルーの民俗楽器ケーナで最も演奏されていることを知る。ケーナは縦笛であり、子どもたちにとって身近な楽器であるリコーダーとも似ていることからリコーダーで演奏することにつなげたい。授業では、音楽の学習だけでなくアンデスの文化に出会う機会を並行して作っていくことで、曲に合う演奏の仕方や工夫を考えさせたい。

（４）ESD との関連

・本学習で働かせる ESD の視点（見方・考え方）

・多様性：アンデスの文化の中には、今の自分たちの暮らしとは違うこともあるということ。
いろんな文化や人の生き方があるということ。

・世代内の公正：世界には様々な環境の中で生活している人がいること。

・本学習で育てたい ESD の資質・能力

・多面的・総合的に考える力

他の国には、言葉や服装、生活の環境の違う人がいること。生活の環境が違えば発展する文化も変わってくるということ。知ろうとすることが大事であること、その違いを認め合って生きていくということ。違いに出会うからこそ、自分たちの自身の見方がかわったり、新しく見えてきたりするものがある。

・他者と協力する態度

ソプラノパートとアルトのパートを、クラス全体や少人数に分かれるなどしてで協力して、演奏する。それぞれが自分のパートの役割を理解し、自分の任されたところに責任を持って演奏しようとする。

・本学習で変容を促す ESD の価値観

・人権・文化を尊重する。（文化多様性の尊重）

自分たちと異なる文化に出会い、批判するのではなく、良さを互いに認め合う。またそれを通して自国の文化の良さを再認識する。

学校だからできる、安心できるなかまと共に演奏することの喜びを感じる。

・達成が期待されるSDGｓ

目標１０

人や国の不平等をなくそう：自分たちの暮らしとは違うアンデス独自の文化を知り、尊重する。

目標１６

平和と公平を全ての人に：文化や信仰の違いを認め合い、自然と共生する。

４．単元の評価基準

(ア)知識及び技能	(イ)思考力・判断力・表現力等	(ウ)主体的に学習に取り組む態度
①曲想（リズム、速さ、調性）を感じとる。曲想と旋律やリズムの特徴との関りや、歌詞の内容とのかかわりについて理解している。 ②アンデスの文化を知っている。	①曲想（リズム、速さ、調性）を感じとって、どのように歌ったらいいかを考えている。 ②曲を聴いて、聞き取ったことと感じ取ったこととのかかわりについて考え、曲の良さを見出し表現につなげようとしている。	①他国に伝わる音楽や表現、それらの人々の暮らしとの関りに興味を持ち、音楽活動を楽しみながら、主体的・共同的に学習活動に取り組もうとしている。 ②自分の役割のパートを、責任を持って演奏しようとしている。

５．単元の指導計画（全８時間）

次	○主な学習活動	○学習への支援	評価
1	○歌詞・旋律を把握する。 １．初めて聞いてどんな感じがしたか出し合う。 ２．少しずつ区切って歌う。 ３．通して歌う。	○曲想を感じ取れるよう、ゆったりとした速度で伸びやかに範唱する。 ○曲想(リズム、速さ、調性)にしぼって注目させる。 ○１人や２人で歌って、自分たちの歌声を聞き合う機会を設ける。	ア① (知・技)
2	○『風とケーナのロマンス』はペルーの民族音楽であることを知る。 １．ケーナで演奏しているものを鑑賞する。 ・哀愁漂う感じ。 ・自然を思わせるような旋律やリズム、速度。 ２．アンデスの文化を知る。 ・自分たちの生活の環境とは大きく違う ・自然と寄り添って暮らしている様子	○ケーナの音色に注目させる。 ○ケーナとリコーダーがよく似ていることから演奏のきっかけをつくる。	ア② (知・技)
3 国語と	○実際にリコーダーで演奏する。 ・少しずつ区切って演奏する。	・リズムが似ているところなどに注目させる。	ア① (知・技)

して	・ソプラノパートとアルトパート、どちらも演奏できるようになる。 ・両パート同時に通して演奏する。	・後半は掛け合いになるところに注目させる。	ウ② （主体的）
4	○どんなふうに演奏したいかを考えて深める。 ○パートごとに分かれて演奏したり、曲の良さを表現したりしようとする。	○クラス全体または少人数で演奏して、自分たちの演奏を聞き合ったり、良さを知り合ったりできるようにする。	イ①② （思判表）